様式３

令和７年度学生支援プロジェクト事業最終報告書

Try!魚っち

～知ろう、守ろう、香川のさかなが見られる移動水族展示～

代表者　　仁井本　麻湖　（経済学部経済学科３年）

１．目的と概要

本プロジェクトは、香川県の自然や生き物をテーマとしたこれまでにない香川県に生息する生き物に特化した移動水族展示事業であり、生物多様性や自然環境の保全の重要性を伝えることを目的に活動を実施した。生息地改変によって絶滅の恐れが高まる淡水魚などの水生生物の展示と共に、ポスターや魚の生態や生息環境をまとめた魚歴書を作成し、生き物を見るだけで終わらない展示となるよう工夫した。また、絶滅の恐れがある種を実際に目にする機会少ない。子どもから大人まで幅広い世代が絶滅の恐れがある種を含め地域の生き物にふれ、興味を持つ場を提供することも目的として活動を実施した。展示する生き物の採集については、香川県希少野生生物保護推進員（香川県指定希少野生生物捕獲等許可(有効期間：令和７年４月１日から令和８年３月31日まで、許可番号第128号)、特別採捕許可(有効期間：令和７年４月１日から令和８年３月31日まで許可番号第18号)を取得、香川県野生生物保護推進員(任期：令和６年４月１日から令和９年３月31日まで、第26号・川田)）の指導の下で採集し、展示後は病気の罹患の有無などに注意を払い、元の生息地に返している。

２．実施期間（実施日）

令和７年４月１日から　令和８年３月31日まで

３．成果の内容及びその分析・評価等

10月12・13日に大川オアシスにて展示を実施した。会場では、来場者が魚に親しみを持てるよう、個々の魚の特徴を紹介する「魚歴書」を水槽横に設置したほか、魚すくいのような体験型アクティビティも用意した。これらの工夫により、小さな子どもから大人まで幅広い層が足を止め、展示に興味を抱く姿が見られた。同時に、希少な淡水魚が生息する農村地帯で収穫されたお米でつくったおにぎりプレートの販売支援（農業者と販売者をつなぐ活動）をした。希少な水生生物が生活するには、農薬を使わない、コンクリート水路にせず土堀り水路を残す、などといった農家にとっては手間のかかる作業が必要である。その手間の報酬として、生き物が生息できる環境で育った安全・安心な農作物が収穫でき、そのような農作物をプレミア化して生き物の応援者を増やすことの一役を担えた。本展示が好評を博したため、大川オアシスの要請を受けて、規模を多少縮小して現在も継続展示中である。

また、2月21日から3月21日にかけては、香川大学博物館特別展として展示を行

った。大川オアシスでの成果を踏まえ、「魚歴書」を継続して活用するとともに、B1サイズのポスターを新たに制作し、魚の生態や水生世物を取り巻く環境、香川県で実践している本学が関係した希少種の保全の取り組みについてより深い説明を加えた。展示開始前から多くの方々に興味を持っていただき、初日から多くの来訪者が訪れた。

これらの展示を通じて、来訪者が魚を見るだけでなく、魚を知り、地域の環境について考えるきっかけを提供できた点は大きな成果である。一方で、改善点としてメンバー内での魚に関する知識量に差があることが挙げられる。説明内容の深さや来訪者への対応にばらつきが生じる場面もあり、今後はスタッフの知識共有の機会を増やすことが求められる。

大川オアシスでの展示の様子

香川大学博物館での展示の様子

４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

本プロジェクトが本学や地域社会に与えた影響として、地元の自然環境や生物多様性への理解、またそれらの保全に対する知識を深める機会を提供できた点が挙げられる。大川オアシスおよび香川大学博物館での展示では、子どもから大人まで幅広い層の来場者が訪れた。魚の展示に加え、個々の魚の特徴を紹介した魚歴書やポスターを用いたことで、来場者が地域の淡水魚や生き物をとりまく環境の実態をより深く知るきっかけとなった。また、絶滅の恐れがある種を実際に目にする機会を提供したことは、地域の自然環境への関心を高める上で大きな意義があったと考える。さらに、淡水魚の保全に取り組む団体が県内では著しく少ないことから、本事業は、地域に根差す本学にとっても生物多様性保全などの観点において、地域社会へ意義ある情報を発信した、有用性の高い、重要な役割を果たした事業といえる。

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

本事業を通して、私たちは展示を「見せる」だけで終わらせるのではなく、どのようにすれば来場者が環境保全や生物多様性の保全について関心を持ってもらえるのかを考える姿勢を身につけることができた。少しでも多くの方々に、香川の希少な生き物の現状を知ってもらい、考えてもらうことの効果ある発信の仕方に難しさを感じた。展示準備や展示運営を進める中で、私たち自身も来場者との交流を通して生物多様性の重要性について、より理解を深めることができた。企画展示や採集の現場での地域の人々との交流を通じては、私たちの知らなかった地域の事情などをより深く、リアルに理解するきっかけになった。展示先との調整では、展示先の意向や制約などを踏まえたうえで、企画展示で行いたいことを伝え、調整するスキルを身に付けることができた。

本プロジェクトは、生物多様性に関する知識などの習得にとどまらず、伝える力の向上、地域とのつながりの深化といった多面的な成長をもたらし、私たちの学生生活に大きな正の影響を与えたと考えている。

６．反省点・今後の展望（計画）・感想等

今年度の活動の反省点として、メンバー内で生物に関する知識量に差があったことが挙げられる。展示ポスター、魚歴書の作成や展示準備を通して知識は増えたものの、イベント当日での来場者から質問に窮する場面もあり、より深い生物種や生物多様性の知識が必要であることを実感した。また、活動に参加するメンバーが固定化しいたため、作業が一部の人に集中し、役割分担が十分に機能しなかった点も反省点として挙げられる。これらの反省点を踏まえ、来年度はミーティングの中に知識共有の時間を設けたり、役割分担を明確化・固定化したりするなど、改善をしていきたいと考える。さらに、本プロジェクトをより発展させるためにメンバーの増員もしていきたいと考える。

今後の展望としては、継続事業では、来年度も大川オアシスでの展示を行う予定である。新規事業では、香川大学医学部付属病院で、地元由来のさかなの鑑賞が患者様や医療従事者などに癒しを与える企画展示を計画中である。今年度の経験を活かし、展示内容の改善や説明方法の工夫を重ねながら、来年度は、地元由来のさかなの鑑賞行動が、患者様や職員の内面に生じさせる癒しやなごみといった心理的効果について調査研究し、生物多様性保全が持続可能な活動となるような、いきものに価値を見出し、守る活動へさらに発展させていきたいと考える。

７．実施メンバー

代表者　仁井本　麻湖（経済学部３年）

構成員　川田　正明（創造工学部博士２年）　笠井　柊哉　（創造工学部４年）
久保　宙大　（創造工学部修士２年）　井上　蓮　（創造工学部４年）
田中　蒼翔（創造工学部４年）　山添　敦史　（経済学部４年）
田岡　友輝（農学部２年）　池田　朋晃　（法学部２年）
岩部　優菜（農学部３年）　田中　佑奈　（創造工学部２年）
岩部　紗子　（教育学部２年）　松崎　花菜　（経済学部４年）
林　若奈（創造工学部１年）　大田侑来（創造工学部１年）
山田　悠衣里（創造工学部１年）　千馬　暖（創造工学部１年）
池尻　夕奈（創造工学部１年）　黒川　茉鈴　（創造工学部１年）
生崎　凌雅（創造工学部１年）　田岡　小乃羽（農学部１年）
瀧　美桜　（経済学部１年）　瀧野　里彩　（医学部１年）

８．執行経費内訳書

配　分　予　算　額		211,454円		
執行経費（品目等）	数量	単価(円)	金額(円)	備　考
寿工芸水槽　クリスタルキューブ300	15	7,810	117,150	
さなぎ粉（魚類採捕飼料）	10	763	7,638	
グルテン（魚類採捕飼料）	10	662	6,620	
純正インクカートリッジCanon BCI-350/BCI-351	3	4,994	14,982	
車両レンタル料10/10	1	13,750	13,750	
車両レンタル料2/12	1	18,150	18,150	
車両レンタル料3/21	1	18,150	18,150	
合　　計			196,440	